

【原著論文】

乳幼児の援助要請行動に関する発達の検討

西元 直美*

A Developmental Study of Help-seeking Behavior in Early Childhood

Naomi Nishimoto

要 旨

本研究は乳幼児の援助要請行動を発達の視点から検討することを目的とするものである。養育者と保育者を対象とした質問紙調査を行い、乳幼児の援助要請行動の見られた年齢、状況、具体的な援助要請行動の記述を求めた。その結果、0歳から6歳までの援助要請行動についての情報が収集された。援助要請の状況および行動を分類したところ、援助要請状況については「困難」「対人関係」「不可能」「要求」の4カテゴリー、援助要請行動については「言語」「非言語」の2カテゴリーが養育者の記述と保育者の記述に共通したカテゴリーとして抽出された。保育者と養育者ともに援助要請状況として最も記述数の多かったカテゴリーは生活習慣において困る状況（「困難」）であり、生活習慣を獲得していく過程では養育者にも保育者にも同様に援助を求める子どもの姿が示された。援助要請状況に記述における養育者と保育者の差を検討した結果、援助者によって援助を求める状況の違いが示された。援助要請行動について、養育者では言葉による援助行動が多く、保育者では言葉によらない援助行動が多かった。言葉によらない行動では、泣いたり、表情や感情表出で訴える行動が最も多かった。また、注意をひくような行動や、「援助者を連れていく」に該当する行動が保育者からの報告にのみ見られた。年齢別に援助を要請する状況についてみると、養育者では年齢による違いが示されたが、保育者ではあまり変化しないことが示された。援助要請行動については養育者にも保育者にも言語発達に伴って言葉による援助要請行動が多くなっていくことが示された。また、保育者には一貫して言葉によらない行動が多いことが示された。最後に、発達初期の乳幼児の援助要請行動についてはアタッチメント理論との関係も踏まえた検討が必要であること、多様な領域の発達や生態学的環境の変化を踏まえた縦断的な検討が必要であることが考察された。

Abstract

The purpose of this study was to examine help-seeking behavior from a developmental perspective. A questionnaire survey of caregivers and nursery teachers was conducted to collect information on the ages, contexts, and behaviors of young children seeking help. As a result, data was collected on help-seeking behaviors in children between the ages of 0 and 6 years. The contexts of help-seeking were classified into four categories: difficult situations, interpersonal relationship situations, impossible situations, and requested situations. Help-seeking behaviors were separated into two types: verbal and non-verbal. These were common

受付日 2021. 9. 10 / 受理日 2021. 12. 22

*関西福祉科学大学 教育学部 准教授

to both caregiver and nursery teacher descriptions. As a result of examining the context of help-seeking, most of the descriptions were classified as difficult situations. The context of help-seeking was different between the descriptions of the caregivers and descriptions of the nursery teachers. As a result of examining such activity, it was noted that there were many voiced help behaviors in the descriptions of the caregivers, yet many non-verbal requests or actions in those of the nursery teachers. Among the non-verbal behaviors, the most common were crying and complaining with facial and emotional expressions. In addition, only nursery teachers reported behaviors that attracted attention and in which children led the teachers to their problems. In the caregiver descriptions, the context of help-seeking differed by age. However, in the nursery teacher descriptions, the context of help-seeking did not differ depending on age. It was shown that the number of verbal help-seeking behaviors increases with language development. Additionally, in the nursery teacher descriptions, there were consistently many non-verbal behaviors.

● ● ○ **Key words** 援助要請行動 help-seeking behavior/乳幼児期 early childhood/養育者 caregiver/保育者 nursery teacher

I 問題と目的

乳幼児の発達は、日々新奇で多様な困難な状況に直面し、その都度その状況を解決するための方略を見つけ、対処行動を身につけていくことの積み重ねといえる。様々な困難に直面し自分の力だけでは解決できないとき、必要に応じて他者に援助を求めることは有用な対処行動のひとつである。それは乳幼児期のみならず、生涯にわたる人の発達にもいえることであろう。

解決できない問題に遭遇したときに、他者に援助を求める行動は援助要請行動 (help-seeking behavior) と呼ばれる。DePaulo (1983) は援助要請行動を「個人が問題の解決の必要があり、もし他者が時間、労力、ある種の資源を費やしてくれた場合、問題が解決、軽減するようなもので、その必要のある個人がその他者に対して直接的に援助を要請する行動」と定義している。Srebnik, Cause, & Baydar (1996) は援助要請 (help-seeking) について「情動的または行動的問題を解決する目的でメンタルヘルスサービスや他のフォーマルまたはインフォーマルなサポート資源に援助を求めること」と定義し、Rickwood & Thomas (2012) は「メンタルヘルス上の懸念に対処するために外的な支援を獲得しようとする、適応的な対処の過程」と包括的な定義を行っている。この包括的な定義について益子 (2020) は、援助要請という概念は問題解決だけで

なく、メンタルヘルスの向上をも成し遂げることを示唆するものであり、援助要請できることは適応を促進する特性であることについて実証研究でも示唆されつつあることを示している。

援助要請行動あるいは援助要請が適応に寄与することが先行研究によって示されている。石黒・榎本・山上・藤岡 (2016) は大学生に質問紙調査を行い、援助要請スタイル (自立型、過剰型、回避型) と生活適応感 (大学生活不安、評価不安、大学不適応) との関連性を検討している。その結果、自立型援助要請は評価不安を低減させること、すなわち、まず自分で問題に取り組み、必要な場合だけ援助を求めることは生活適応感を促進させることや、回避型援助要請は大学不適応を増加させること、言い換えれば援助要請を回避することが不適応につながることを示している。本田・新井・石隈 (2015) による援助要請行動から適応感に至るプロセスモデルの検証を目的とした研究では、中学生を対象とした質問紙調査から援助要請が学校生活享受感を高め、ストレス反応を軽減することを示している。

援助要請に関する研究は、援助者に援助を求めるかどうかの認知的枠組みである被援助志向性 (help-seeking preference)、援助を要請することに対する態度や考え方である援助要請態度 (attitude toward help-seeking)、援助が必要な状況になった場合に援助を求

めるかどうかを問う援助要請意図 (help-seeking intention) や援助要請意志 (willingness to help-seeking) などの認知的な側面に関する研究と、援助要請行動という行動的側面に関する研究が行われてきている。援助要請行動の実態を捉えた研究もあり、相談行動を援助要請行動の一形態として、中学生の悩みとその実態を質問紙調査によって明らかにした研究 (永井・新井, 2005) や、小学生4年生～6年生を対象に行った質問紙調査から援助要請行動や援助要請態度について検討した研究 (佐藤、渡邊, 2013) が挙げられる。援助要請に関する研究の多くは大学生を対象とした臨床心理学的場面や児童・生徒を対象とした教育心理学的場面における援助要請についての研究である。

乳幼児を対象とした研究は極めて少ないが、実験室における課題解決場面での援助を求める行動を観察する研究が挙げられる。Cluver, Heyman, & Carver (2013) は2歳児と3歳児を対象とした実験で、課題解決場面において子どもとアイコンタクトを取り、抑揚のある話し方をして課題を解決することができる援助者 (good helper) と、アイコンタクトをせず、単調な話し方をして課題を解決することができない援助者 (bad helper) を被験児に見せ、被験児が同様の課題解決場面でどちらの援助者を選択するかを観察し、前者 (good helper) を選択することを明らかにするとともに、2歳児よりも3歳児のほうが援助要請行動を多く行ったことを示している。Thompson, Cothran, & McCall (2012) は2歳児～5歳児を対象に、難しいパズルに取り組むという課題において、隣に座っている実験者に援助を求めるかどうかを検討し、課題が難しくなるほど援助要請行動が増え、年長の幼児であるほど難しい場面で援助要請を多く行っていたことを示している。また、Benenson & Kounazarian (2008) は3歳児と6歳児を対象として、絵を描く課題、パズル課題などを行い、実験者に援助を要請する早さを調べ、4歳児の方が6歳児よりも早く援助要請を行っていたことを示している。このように乳幼児を対象とした研究では、援助要請行動を行う対象 (援助者) の選択や、援助要請行動の頻度と課題の難易度との関係、援助要請行動を行う早さにおける年齢差などが実験場面で検討されている。

また、日本においては日常場面での幼児の援助要請行動を検討した研究が行われている。池田・岡田

(2019) は保育場面での幼児の援助要請行動の観察を行い、問題を解決する多様な援助要請行動を明らかにするとともに、幼児の援助要請行動に対する保育者の対応やその対応に対する幼児の反応について検討している。対象年齢は3歳児から5歳児であり、保育時間において計36時間の参与観察を行い、幼児の日常場面のひとつである保育場面における援助要請行動が捉えられている。しかし、3歳児以前の援助要請行動について検討している研究は日本では見当たらず、加えて、乳幼児にとっての主たる援助者と考えられる養育者に対する援助要請行動についての検討はなされていない。また、本田 (2015) は援助要請研究には「人はなぜ援助を求めないのか?」という問題を扱う援助要請過程に関する研究と、「人はどのように援助を求めると健康になるのか?」という問題を扱う援助要請行動の影響過程に関する研究の2つの方向性があるが、援助要請研究において発達の視点が考慮されていないことを指摘している。

そこで本研究では、家庭および集団生活の場を含めた乳幼児の生活場面全般における援助要請行動の実態を明らかにし、発達の視点から乳幼児の援助要請行動を検討することを目的とする。具体的には、多様な場面での援助要請行動を捉えるため、乳幼児にとって家庭での主たる援助者となる養育者と、集団保育場面において主たる援助者となる保育者に対して質問紙調査を行い、その結果から乳幼児が援助を要請する状況、援助を要請する方法 (行動) について年齢的变化を含めて検討する。

II 方法

対象 大阪府内の私立認定こども園の保育者および園児の養育者。

手続き 認定こども園の保育者および園児の養育者に対して乳幼児の援助要請行動についての自由記述形式による質問紙調査を行った。調査実施時期は2019年9月であり、2週間程度で回収を行った。保育者への配布・回収は調査協力園に依頼し、養育者への配布・回収はクラス担任保育者に依頼した。保育者には「これまで担任された子どもたちが園で「何か手助けをしてほしい」ときの様子についてお聞かせください。そ

それぞれの子どもの様子を思いつくままにお書きください。」という質問を行い、養育者には「お子様が「何か手助けをしてほしい」ときの様子についてお聞かせください。最近の様子でも、これまでの様子でもかまいません。また、複数のお子様がいらっしゃる場合は、それぞれのお子様の様子を思いつくままにお書きください。」という質問を行った。どちらの回答においても、年齢（何歳ごろ）、状況（どんなとき）、対象（誰に）、行動（どんなふう）についての記述を求め、保育者には保育経験年数についても尋ねた。なお、今回は回答の簡便さを考慮して性別については記述を求めなかった。回答が得られたのは保育者14名（経験年数 平均8.4年 範囲1年未満～20年）、養育者37名であった。

倫理的配慮 調査協力園に対しては研究目的と趣旨、データの取り扱いにおける個人情報保護の遵守を口頭で説明し、保育者および養育者に対する調査への協力の同意を得た。また調査対象となる保育者および養育者に対しては、紙面にて研究目的と趣旨、データの取り扱いにおける個人情報保護の遵守を説明し、協力の同意が得られる場合のみ回答を依頼した。質問紙への回答は無記名であり、個別封筒によって回収を行い、協力が難しい場合には白紙提出とした。なお、本研究の質問紙調査は関西福祉科学大学研究倫理委員会の承認（承認番号19-18）を受け実施されたものである。

Ⅲ 結果

1 援助要請行動の記述数 援助要請行動についての回答者別記述数を Table 1 に示す。回答者別の1人あたりの平均記述数は援助要請の状況（どんなとき）についての記述（以下、状況記述）数でも、援助要請の行動（どんなふう）についての記述（以下、行動記述）数でも、保育者のほうが多かった。

2 援助要請行動の年齢別記述数 年齢別状況記述数を Table 2-1 に、年齢別行動記述数を Table 2-2 に示す。年齢範囲は養育者が0歳代から6歳代、保育者が0歳代から5歳代であった。

3 援助要請行動の状況記述および行動記述の分類と記述数 状況記述および行動記述について、それぞれ回答者別に KJ 法を援用して発達心理学を専門分野とする研究者2名によって分類を行った。

状況記述は小分類として養育者記述では11カテゴリー、保育者記述では8カテゴリーが抽出された。そこから中分類として養育者記述は9カテゴリー、保育者記述は7カテゴリーに分類された。さらに、養育者記述と保育者記述に共通した大分類として「困難」「対人関係」「不可能」「要求」の4カテゴリーに分類された。「困難」は食事の際に苦手なものがあったり上手に食べられないときや、着脱がうまくできないとき、手洗いができなかつたり、タオルがないとき、探しているものが見つからないとき、排泄を失敗したときなど、必ずしもできないわけではないが難しい状況あるいはできなかった状況に関する記述が含まれるカテゴリーである。「対人関係」はきょうだいや友達とケンカしたときや、物の貸し借りうまくできないとき、他者に思いが伝わらないときなどが含まれるカテ

Table 1 回答者別記述数

	人数	状況記述	行動記述
養育者	37	83(2.24)	98(2.65)
保育者	14	53(3.78)	67(4.78)
計	51	136(2.67)	165(3.24)

() は一人あたりの平均記述数

Table 2-1 年齢別状況記述数

	0歳	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳	6歳
養育者	1(1.20)	15(18.07)	17(20.48)	22(26.51)	15(18.07)	12(14.46)	1(1.20)
保育者	2(3.77)	14(26.42)	21(39.62)	10(18.87)	4(7.55)	2(3.77)	-
計	3(2.21)	29(21.32)	38(27.94)	32(23.53)	19(13.97)	14(10.29)	1(0.74)

() は全年齢におけるパーセンテージ

Table 2-2 年齢別行動記述数

	0歳	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳	6歳
養育者	1(1.02)	18(18.37)	19(19.39)	26(26.53)	19(19.39)	14(14.29)	1(1.02)
保育者	2(2.99)	15(22.39)	24(38.82)	18(26.87)	6(8.96)	2(2.99)	-
計	3(1.82)	33(20)	43(26.06)	44(26.67)	25(15.15)	16(9.70)	1(0.61)

() は全年齢におけるパーセンテージ

ゴリーである。「不可能」は文字などがわからなかったり、お菓子の袋やペットボトルのキャップを開けることができなかつたり、造形活動でその方法がわからなかつたりうまくできないときや、指示が理解できないときなど明らかに「できない」という状況の記述が含まれるカテゴリーである。「要求」は面倒なのでやってほしいときや、おやつなどのおかわりが欲しいとき、手に届かないものをもって欲しいときなど子どもが「して欲しい」という意図が示されている記述が含まれるカテゴリーである。

状況記述の大分類および中分類の回答者別記述数(%)と全回答者の合計記述数(%)を Table 3-1 に示す。

全回答者記述について記述数の多い順に大分類カテゴリーの記述数を見ていくと、食事場面や着脱時、排泄、その他日常の困難な状況(大分類「困難」、以下「困難」)についての記述が50.00%、うまくできない状況やわからない状況(大分類「不可能」、以下「不可能」)についての記述が29.41%、その他の要求(大分類「要求」、以下「要求」)が13.24%、きょうだいや他児とのいざこざ(大分類「対人関係」、以下「対人関係」)についての記述が4.38%であった。回答者別にみると、養育者記述では「困難」についての記述が42.16%であり、「不可能」についての記述が39.76%、「要求」についての記述が14.46%、「対人関係」が3.61%であり、保育者記述では「困難」の記述が

62.26%、「対人関係」と「不可能」がそれぞれ13.2%、「要求」についての記述が11.30%であった。

養育者と保育者では状況記述の内容に違いがあるのかを検討するため、回答者(養育者、保育者)と状況記述の大分類カテゴリー別記述数との関連について χ^2 検定を行ったところ有意であり($\chi^2=14.65, df=3, p<.01$)、残差分析から「不可能」は養育者の記述が養育者の記述よりも有意($p<.05$)に多く、「困難」「対人関係」は保育者の記述のほうが保育者の記述よりも有意($p<.05, p<.01$)に多いことが示された。

行動記述は養育者記述と保育者記述に共通した大分類として2カテゴリーが抽出された。中分類として養育者記述では7カテゴリーが抽出され、保育者記述では9カテゴリーが抽出された。小分類として養育者記述では11カテゴリー、保育者記述では13カテゴリーが抽出された。行動記述の大分類および中分類の回答者別記述数(%)と全回答者の合計記述数(%)を Table 3-2 に示す。

全回答者記述について状況記述と同様に見ていくと、言葉で訴える発語による援助要請行動(大分類「言語」、以下「言語」)の記述が44.24%、情動表出や接近など言葉によらない援助要請行動(大分類「非言語」、以下「非言語」)の記述が55.76%であった。回答者別にみると、養育者記述では「言語」が59.18%、「非言語」が40.82%であるのに対し、保育者記述では「言語」が22.39%、「非言語」が77.61%であっ

Table 3-1 状況記述の分類と記述数(%)

大分類	中分類 *養育者のみ	小分類 *養育者のみ *保育者のみ	養育者		保育者		計 大分類
			大分類	中分類	大分類	中分類	
困難	困難(食関連)	食事場面での困難		4(4.82)		2(3.80)	
	困難(着脱関連)	着脱時の困難		20(24.10)		18(34.00)	
	困難(日常)	ものが見つからない*					
		生活習慣における困難※ その他の困りごと※		35(42.16)	2(2.41)	33(62.26)	9(17.00)
困難(排泄関連)	排泄に関する困難		9(10.84)		4(7.50)		
対人関係	対人関係	きょうだいとのいざこざ* 他児とのいざこざ※	3(3.61)	3(3.61)	7(13.20)	7(13.20)	10(4.35)
不可能	不可能(身体・認知的)	うまくできない* うまくできない・わからない		11(13.25)		7(13.20)	
	不可能(身体的)*	(お菓子の袋などが)開けられない* (高いところのものなどを)とってほしい*	33(39.76)	17(20.48)	7(13.20)	-	40(29.41)
	不可能(認知的)*	(文字などが)わからない*		5(6.02)		-	
要求	要求	その他の要求	12(14.46)	12(14.46)	6(11.30)	6(11.30)	18(13.24)

Table 3-2 行動記述の分類と記述数 (%)

大分類	中分類 ※保育者のみ	小分類 ※保育者のみ	養育者		保育者		計
			大分類	中分類	大分類	中分類	大分類
言語	発話	言葉で訴える (できないこと)	58(59.18)	58(59.18)	15(22.39)	15(22.39)	73(44.24)
		言葉で訴える (してほしいこと)					
		言葉で訴える (その他)					
非言語	情動表出	泣く	40(40.82)	-	52(77.61)	-	92(55.76)
		表情で訴える					
		感情を示す					
	接近	近づいてくる	2(2.00)	2(2.99)			
	待機	待つ	3(3.06)	7(10.45)			
	注意喚起※	注意をひく※	-	3(4.48)			
	注視	見つめる (対人)	4(4.08)	9(13.43)			
	提示	指し示す・提示する	5(5.10)	8(11.94)			
	誘導※	ひっぱる、連れて行く※	-	6(8.96)			
	その他	その他	8(8.16)	2(2.99)			

た。

養育者と保育者では行動記述の内容に違いがあるのかを検討するため、回答者（養育者、保育者）と行動記述の大分類カテゴリー別記述数との関連について χ^2 検定を行ったところ有意であり（ $\chi^2=21.84$, $df=1$, $p<.001$ ）、残差分析から「言語」は養育者の記述のほうが保育者の記述よりも有意（ $p<.01$ ）に多く、「非言語」は保育者の記述のほうが養育者の記述よりも有意（ $p<.01$ ）に多いことが示された。

4 援助要請行動の状況記述および行動記述の記述内容と年齢 状況記述について年齢ごとの大分類カテゴリー（「困難」「対人関係」「不可能」「要求」）の記述数割合を、回答者別（全回答者記述、養育者記述、保育者記述）に示す（Figure 4-1、4-2、4-3）。

全回答者記述について0歳では主たるカテゴリーが「要求」であり、「対人関係」「不可能」に該当する行動は見られなかった。1歳では「困難」「不可能」「要求」が同率で主たるカテゴリーであり、2歳及び3歳では「困難」が主たるカテゴリーであった。4歳では「困難」と「不可能」が同率で主たるカテゴリーであり、5歳では「不可能」が主たるカテゴリーであった。6歳は「不可能」のみであった。

養育者記述においては、0歳では「要求」のみであり、1歳では「不可能」、2歳と3歳では「困難」、4歳と5歳では「不可能」が主たるカテゴリーであり、6歳では「不可能」のみであった。なお、2歳では「対人関係」と「要求」に該当する行動は見られず、5歳では「対人関係」に該当する行動が見られな

かった。

保育者記述について、0歳では「困難」「要求」が同率でありその他のカテゴリーに該当する行動は見られなかった。1歳から4歳まで主たるカテゴリーは「困難」であり、3歳では「要求」、4歳では「不可能」と「要求」に該当する行動は見られなかった。5歳では「対人関係」と「不可能」が同率でありその他のカテゴリーに該当する行動は見られなかった。

行動記述について年齢ごとの大分類カテゴリー（「言語」「非言語」）の記述数割合を、回答者別（全回答者記述、養育者記述、保育者記述）に示す（Figure 4-4、4-5、4-6）。

全回答者記述について、0歳では「非言語」のみであり、1歳、2歳では非言語が主たるカテゴリーであったが、3歳では「言語」が主たるカテゴリーであった。4歳では「非言語」、5歳では「言語」が主たるカテゴリーであり、6歳では

養育者記述においては、0歳では「非言語」のみ、1歳では「非言語」が主たるカテゴリーであった。2歳から5歳は「言語」が主たるカテゴリーであり、6歳では「非言語」のみであった。

保育者記述においては、0歳および1歳では「非言語」のみ、2歳から4歳では「非言語」が主たるカテゴリーであり、5歳では「言語」「非言語」が同率であった。

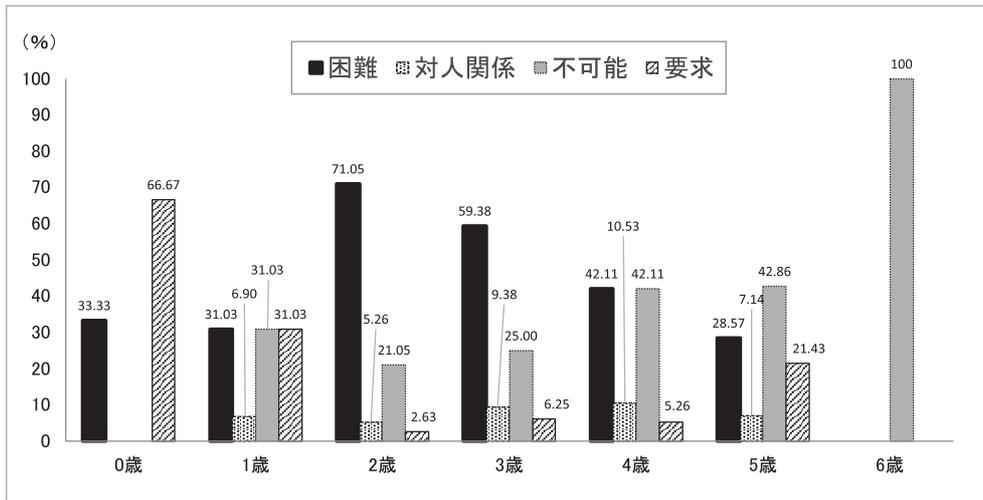


Figure 4-1 各年齢における状況カテゴリー（大分類）の割合（全回答者記述）

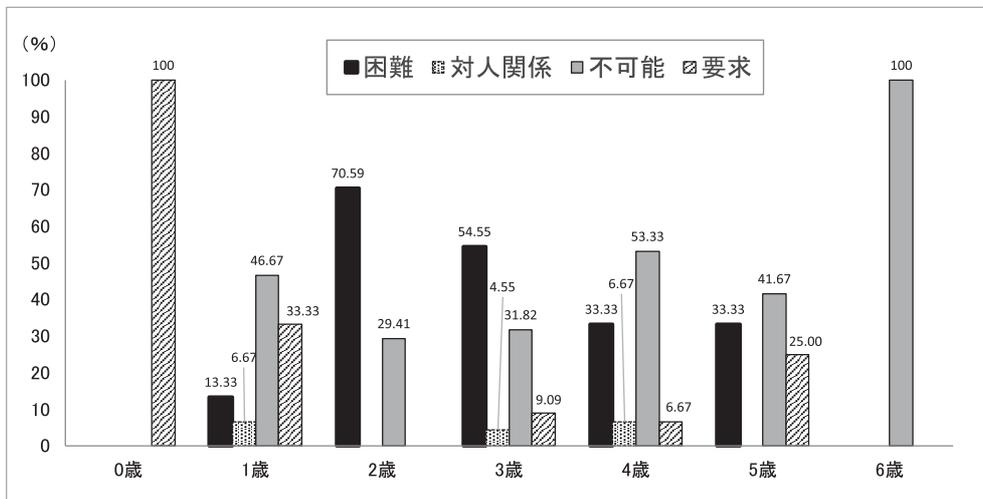


Figure 4-2 各年齢における状況カテゴリー（大分類）の割合（養育者記述）

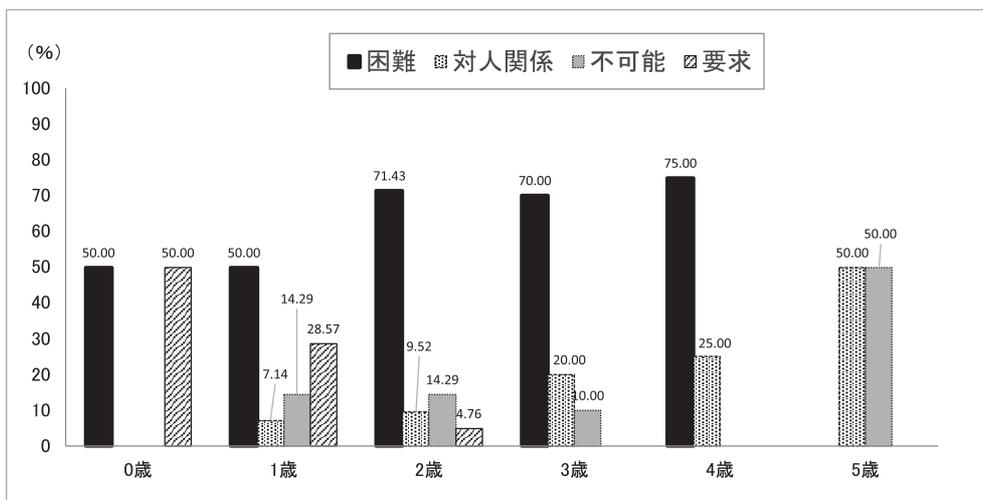


Figure 4-3 各年齢における状況カテゴリー（大分類）の割合（保育者記述）

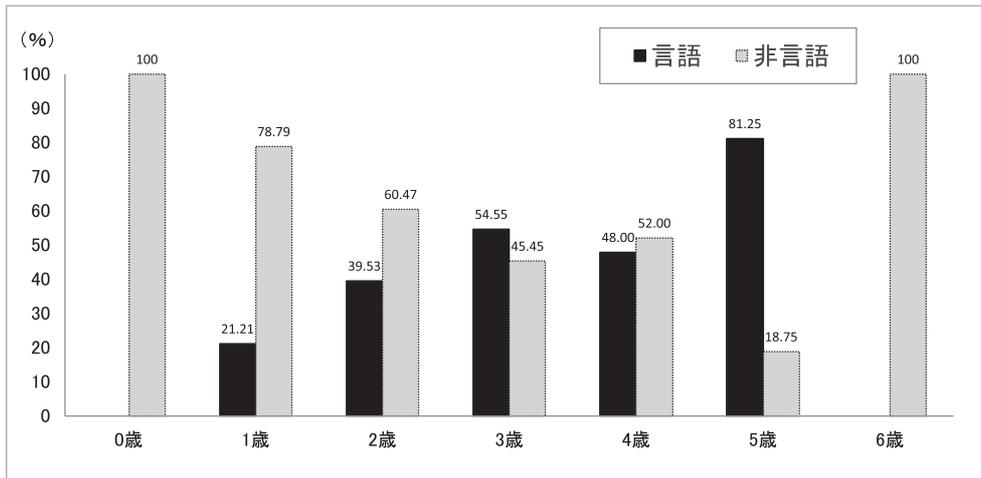


Figure 4-4 各年齢における行動カテゴリー（大分類）の割合（全回答者記述）

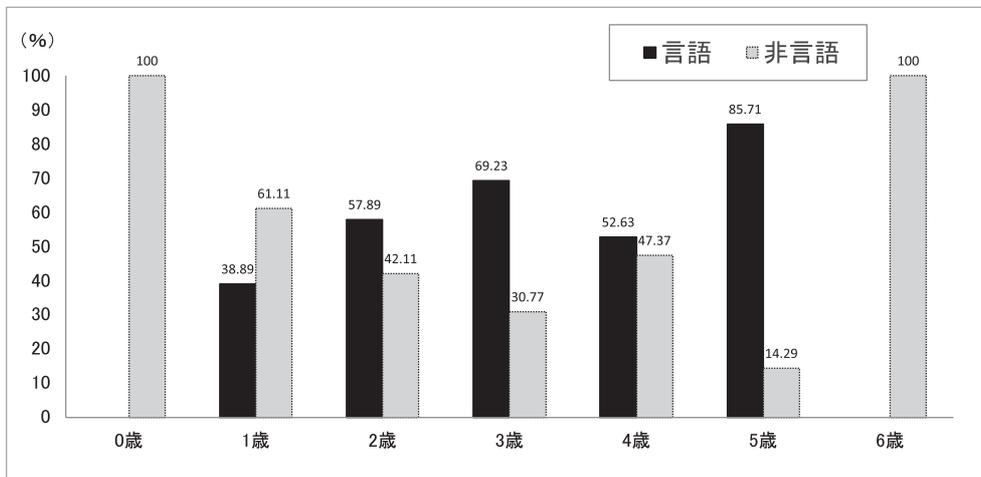


Figure 4-5 各年齢における行動カテゴリー（大分類）の割合（養育者記述）

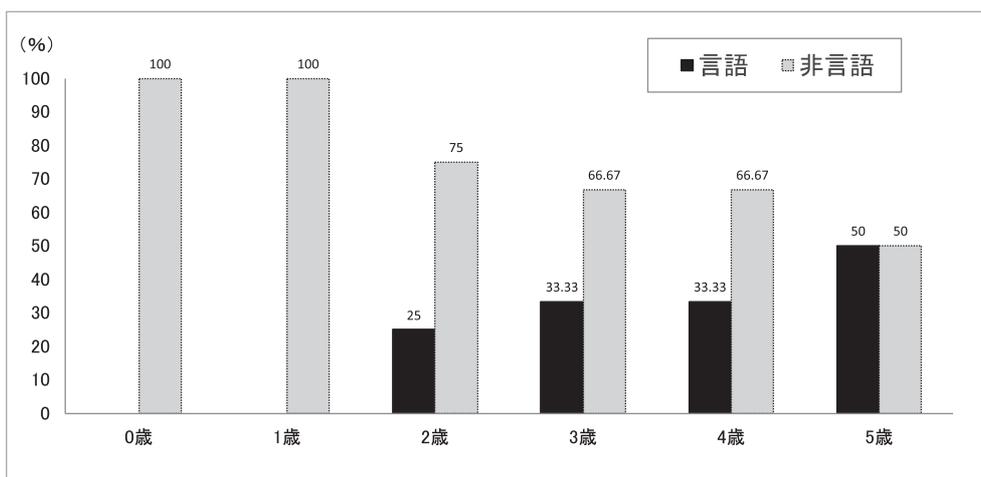


Figure 4-6 各年齢における行動カテゴリー（大分類）の割合（保育者記述）

IV 考察

援助要請行動の記述数 日常において乳幼児が援助を求める行動についての養育者と保育者から報告を一人あたりの平均記述数から見ると、保育者のほうが状況に関する記述も行動に関する記述も多く、特に行動については多くの記述がみられた。養育者は自身の子どもについての報告のみであるのに対して、保育者は多くのさまざまな子どもと関わっており、多様な援助要請場面や援助要請行動を経験しているためと考えられる。

記述された年齢については、養育者は0歳から6歳、保育者は0歳から5歳であり、実験室での観察による先行研究 (Cluver, Heyman, & Carver, 2013) や自然場面の観察による先行研究 (池田・岡田, 2019) で対象となったのは前者が2歳以上、後者が3歳以上であった。今回の結果から先行研究で対象となっている年齢以前から援助要請行動がみられることが示された。発達初期の援助要請行動はアタッチメント行動とみることも必要であろう。アタッチメント行動は他者からの養育行動を引き出す行動であるが、他者からサポートを引き出す、他者にサポートを求める行動としても解釈できる。2歳未満児の援助要請行動については、アタッチメント理論を踏まえた検討やアタッチメント行動と切り分けられるのかを含めた検討が必要である。

年齢別の記述数を見てみると、状況記述も行動記述も養育者は3歳が多く、保育者は2歳が多い傾向がみられたが、年齢についてはおおよその年齢を尋ねており、養育者の場合には実年齢、保育者の場合にはクラス年齢 (4月時点の年齢) で回答されている可能性がある。そのため、例えば9月で3歳になる子どもであれば、養育者にとって9月以降は「3歳」という認識となるだろうが保育者にとっては2歳児クラスの子どもであるため「2歳」と認識して回答していることが考えられる。今回の調査では援助要請行動のエピソードを抽出することに主眼をおいたため、年齢については回答のしやすさを考えて乳幼児の正確な年齢 (月齢) を求めている。記述数の多い年齢について、養育者と保育者の違いが見られるものの、概ね3歳前後の時期の記述が多いと解釈できる。3歳児に援助行動が多いことは、課題解決場面での行動観察から2歳児

よりも3歳児のほうが援助要請行動を多く行ったことを示す先行研究 (Cluver, Heyman, & Carver, 2013) の結果とも一致するものである。しかし、3歳前後で援助要請行動が増加したのち、4歳、5歳では減少している。援助要請行動の発達的变化の検証については縦断的検討が必要であり、なぜ3歳前後で増加するのか、なぜ3歳以降は減少するのかも含めて今後の検討課題である。

援助要請行動の分類 (状況) 状況記述を分類した結果、共通カテゴリーである大分類は「困難」「対人関係」「不可能」「要求」であり、そのうち「人間関係」と「不可能」は池田・岡田 (2019) による自然観察から得られた援助要請行動のエピソードの「人間関係の問題」と「身体能力の限界/認知能力の限界」に相当するものと考えられる。今回の調査結果において最も記述数の多いカテゴリーは養育者記述、保育者記述ともに「困難」であった。「困難」のなかでも多いのは着脱場面で困っている状況である「着脱時の困難」であり、これは先行研究 (池田・岡田, 2019) では「身体能力の限界」に相当すると考えられる。「困難」には着脱時以外に食事場面、排泄、その他生活習慣に関して困る状況が含まれる。乳幼児期を通して生活習慣を身につけることは保育の目標とされることでもあるが、そうした生活習慣を獲得していく過程では養育者にも保育者にも同様に援助を求めることが多いことが明確になった。

乳幼児が援助を求める状況として、養育者記述からも保育者記述からも「困難」な状況が多く挙げられていたが、援助要請状況の各カテゴリーの記述数について養育者記述と保育者記述の差を検討したところ、養育者は「不可能」について保育者よりも多く記述しており、保育者は「困難」「対人関係」について養育者よりも多く記述していた。このことから、養育者には「できないこと」や「わからないこと」に対して助けを求めるが、保育者にはそうした状況ではあまり助けを求めておらず、保育者には困ったことや対人関係上の解決が難しいことについて助けを求める傾向があり、養育者と保育者で援助を要請する状況が異なることが示された。養育者と保育者では家庭と集団生活の場といった一緒に過ごす場面の違いや、関係性の違いがある。また、場面や援助者の違いに関係なく援助要請行動がみられる子どももいれば、場面の違いや援助

者によって援助要請行動の違いがみられる子どもいるのではないだろうか。そうした場面の違いや援助者の違い、その違いの影響における個人差を含めて乳幼児の援助要請行動の生じる状況について捉えていく必要がある。

援助要請行動の分類（行動） 行動記述を分類した結果、共通カテゴリーとしての大分類は「言語」と「非言語」であり、それぞれの記述数について養育者記述と保育者記述の差を検討したところ、養育者は「言語」の記述が保育者よりも多く、保育者は「非言語」の記述が養育者よりも多かった。今回の結果は援助を要請される側に対しての質問紙調査であり、援助者が認識する援助要請行動である。そのため、子どもの状況や行動に対する敏感さや解釈が反映される。言葉による援助要請は明確であるが、言葉によらない援助要請は受け手の認識次第である。養育者は子どもの心をやや過剰に推測する傾向、心の状態を気遣う傾向（mind-mindedness）があり、子どもに対して応答的に対応するように考えられるが、今回の結果では保育者と比べると言葉によらない援助要請の受け取りが少なかった。このことは子どもの非言語サインに対する養育者の敏感さの不足と考えられるかもしれないが、養育者が子どもの出生時から子どもの心の状態を時には過剰に推測しながら応答的に対応し、関係を築いてきているのだとすれば、もはや子どもの非言語サインを意識することなく応答しているとも考えられる。つまり、子どもの非言語サインの読み取りが自動化されており、子どもが援助を要請する行動として認識されなかったのではないだろうか。一方、保育者は乳幼児の言葉を代弁する役割を常に意識しており、養育者よりも言語以外のサインを敏感に受け取り解釈しているとも考えられるし、あるいは養育者に比べて意図的に子どもの心を推測しているため報告が容易であったとも考えられる。援助要請の主体である乳幼児の立場から考えると、乳幼児は養育者に対しては助けてほしいことを言葉で伝えやすく、保育者には伝えにくいという援助を要請する対象との関係性の違いを考慮する必要がある。援助する側の要因や援助者と被援助者との関係性といった要因について、今後さらなる検討が必要である。

「非言語」には泣いたり表情や感情表出で訴える「情動表出」、近づいてくる「接近」、待っている「待

機」、援助者を見つめる「注視」、指し示したり提示する「提示」などが養育者記述にも保育者記述にも共通して含まれていた。そのなかでも「情動表出」が最も多く、乳幼児にとって何らかの方法で感情を表すことが援助を要請する手段であり、援助を引き出す役割を担っていると考えられる。また、保育者記述のみに見られた非言語行動として、注意をひくような行動をする「注意喚起」、援助者を連れて行く「誘導」が挙げられる。集団生活の場において助けを求めるには、まず自身への注目が必要であることや、強引な手段で援助者を引き寄せる必要があることを示唆している。しかし、環境や援助を要請する相手によって援助要請行動が異なるのか、援助要請行動の個人差であるのかは詳細な検討が必要である。

池田・岡田（2019）の研究における行動観察の結果からは、言葉以外の方法で援助を依頼することと言葉で依頼するという行動の両方を同時にしていたことが報告されているが、今回は発語を伴う援助要請行動はすべて「言語」と分類していることから、「非言語」に分類される行動には発語は伴っていない。言葉による援助要請行動にも非言語的要素は含まれることを考えると、援助要請行動をより詳細に捉えるためには行動を「言語」「非言語」「言語＋非言語」という視点で分類し検討することが必要であり、今後の課題である。

援助要請行動と年齢 援助を要請する状況として最も記述数が多かったカテゴリーは「困難」であるが、養育者と保育者を合わせた全回答者記述について、各年齢における「困難」の占める割合では、2歳での比率が最も高く、年齢が上がるにつれてその比率は減少している。その一方で比率が上昇しているのが「不可能」である。概ね同様の傾向が養育者記述でもみられるが、保育者記述では2歳～4歳まで「困難」の割合は概ね同じである。このことから、助けを求める状況について養育者記述からは年齢による違い（変化）があることが示されたが、保育者記述においては助けを求める状況が年齢によってあまり変化しないことが示された。また、養育者では0歳は「要求」のみであるのに対して、保育者には「困難」も報告されたり、保育者では5歳で「困難」が報告されていない。こうした違いは養育者の視点と保育者の視点による違いと解釈することもできるが、環境の違いとも考えられる。援

助を必要とする状況の出現可能性は家庭と集団生活の場という違いや、養育者と保育者という援助者との関係性、きょうだいや友人といった対人関係も含めた生態学的環境の違いによって異なることが推測される。援助要請状況の検討には援助要請者の認知発達や行動発達はもちろんのこと、上述のような環境の違い、さらには生態学的環境の時間経過（加齢）も考慮する必要がある。

援助要請行動について「言語」と「非言語」という分類からみていくと、言語発達に伴って発語による援助要請行動が多くなっていくことが示された。特に養育者記述では1歳から2歳にかけて言葉による援助要請行動と言葉によらない援助要請行動の比率が逆転していることから、言語発達が著しい2歳前後から援助要請行動が多くなっていることが明らかである。しかし保育者記述では、2歳から言葉による援助要請行動の比率が増加していくものの、4歳までのすべての年齢において言葉以外の方法による援助要請行動、非言語による援助要請行動のほうが多い。このことについて、援助要請者が相談者によって援助要請行動の方法を変えているのか、保育者が年齢を問わず子どもの言語化できない気持ちを汲み取ろうとしていることの表れであるのかはさらなる検討が必要である。

乳幼児の援助要請行動について養育者と保育者からの報告に基づいた検討を行った。乳幼児の援助要請行動については実験室や自然場面での行動観察によって検討されてきていたが、今回、援助要請者の身近な他者であり援助要請者となる養育者と保育者を対象とした調査によって、これまで研究対象とされてこなかった0歳児や1歳児についても検討する必要があることが示された。発達初期の乳幼児の行動についてはアタッチメント理論を踏まえた検討も必要であろう。

本田（2015）は援助要請行動はアタッチメント行動として理解できるが、これまでの援助要請研究の中で援助要請とアタッチメントの概念の異同を詳細に検討した研究は見られないことを指摘している。Bowlby（1969/1982 黒田・大羽・岡田・黒田訳 1976/1991）によって特定の大人が「安全基地」あるいは「安全な避難所」として存在することの重要性が示されている。子どもは安全基地を基盤として探索行動を行うが、不安になったり怖い思いをしてネガティブな感情状態に

なると安全基地を安全な避難所として活用し、そこで慰められ元気づけられてまた安全基地から探索行動へ出発する。このサイクルは安全感の輪（安心感の輪）と呼ばれる。援助要請行動は具体的に困っていること、してほしいことを訴えている行動であるが、自分の思い通りにならないことからネガティブな感情状態となり、その感情状態を立て直すために援助を要請していると考えれば、そうした行動は安全感の輪における避難所への避難行動、アタッチメント行動と解釈できる。アタッチメント行動と援助要請行動の関連についてはさらなる議論が必要であるとともに、アタッチメント行動はアタッチメントタイプの影響を受けることから、援助要請者と援助者のアタッチメントタイプと援助要請行動との関連についての検討が必要である。

また、当然のことながら援助要請行動という社会的行動について検討するにあたっては、乳幼児期を通して身体発達や認知発達を踏まえた検討も必要である。さらには、援助要請行動を発達的に検討していくには、多様な領域の発達や生態学的環境の変化について縦断的な検討も必要であろう。今回の養育者からの報告は、1人の子どもの様々な年齢における行動の記述であるとすれば縦断データであることも考えられるが、保育者の報告は様々な子どもの横断データと考えられる。保育者の報告については保育経験年数の影響も考えられる。今回は分析対象人数が少なく、経験年数を考慮した検討を行わなかったが、養育者も含めて援助者の個人差についての検討も必要であると考えられる。

乳幼児の援助要請行動について縦断的に検討した研究はまだ見当たらない。今後、縦断データを用いた援助要請行動の発達について個人要因、環境要因を含めた検討によって乳幼児の援助要請行動の発達を考察していくことが必要である。

付記

本研究は JSPS 科研費（JP19K02656）の助成を受けて実施した研究の一部です。本研究にご協力いただきました認定こども園の保護者の皆様ならびに保育者の皆様に心より感謝いたします。

【引用文献】

- Benenson, J. F., & Koulazarian, M. (2008). Sex differences in help-seeking appear in early childhood. *British Journal of Developmental Psychology*, 115, 570-578.
- Bowlby, J. (1969/1982). *Attachment and Loss. Vol.1. Attachment*. London: The Hogarth Press. (ボウルビイ, J. 黒田実郎・大羽 葵・岡田洋子・黒田聖一 (訳) (1976/1991). *母子関係の理論 I 愛着行動* (新版) 岩崎学術出版社).
- Cluver, A., Heyman, G., & Carver, L. J. (2013). Young children selectively seek help when solving problems. *Journal of Experimental Child Psychology*, 115, 570-578.
- DePaulo, B. M. (1983). Perspective on help-seeking. In B. M. DePaulo, A. Nadler, & J. D. Fischer (Eds.), *New Directions in Helping: Vol. 2 Help-seeking*. New York: Academic Press, 3-12.
- 本田真大 (2015). 幼児期, 児童期, 青年期の援助要請研究における発達の観点の展望と課題, 北海道教育大学紀要 教育科学編, 65, 45-54.
- 本田真大・新井邦二郎・石隈利紀 (2015). 援助要請行動から適応感に至るプロセスモデルの構築, *カウンセリング研究*, 48, 65-74.
- 池田七海・岡田涼 (2019). 保育場面における幼児の援助要請行動, *子育て研究*, 9, 31-41.
- 石黒良和・榎本玲子・山上精次・藤岡新治 (2016). 援助要請と生活適応感の関連性～自尊感情と他者軽視の観点から～, *専修人間科学論集 心理学篇*, 6(1), 31-40.
- 永井智・新井邦二郎 (2005). 中学生における悩みの相談に関する調査, *筑波大学発達臨床心理学研究*, 17, 29-37.
- Rickwood, D., & Thomas, T. (2012). Conceptual measurement framework for help-seeking for mental health problems. *Psychology Research and Behavior Management*, 5, 173-183.
- Srebnik, D., Cause, A. M. & Baydar, N. (1996). Help-seeking pathways for children and adolescents. *Journal of Emotional and Behavioral Disorders*, 4, 210-220.
- Thompson, R. B., Cothran, T., & McCall, D. (2012). Gender and age effects interact in preschoolers help-seeking: Evidence for differential responses to changes in task difficulty. *Journal of Child Language*, 39, 1107-1120.